地域づくりの主体形成と青年に関する研究（続）

小　林　平　造

（1996年10月15日　受理）

A Study on building up Independent Youth Who can create a New Community
(the Continuation of Study)

Heizo KOBAYASHI

は　じ　め　に

小論は，同表題論文（「地域づくりの主体形成と青年に関する研究 ― 地域社会教育実践論創造の視点から ― 」；『鹿児島大学教育学部紀要，人文科学編』第47巻1996年）に続くものである。前論文と同地域の一，二の実践も再度とりあげながら関連する新たな地域と実践を紹介しつつ論点を深めていくことを目的としている。ここでは現在の地域に形成される文化と具体的な青年の役割および諸活動の持つ青年の自己形成にとっての意義についてが検討の対象である。

1．問題の所在

小論の課題は，地域創造の主体を形成する青年教育実践の今日的な可能性と課題を明らかにすることにある。このテーマに迫っていくためには，各実践をめぐる二側面の課題の吟味が必要である。一つは，現代青年の自立の課題である。二つは，地域づくりの主体形成と青年の問題をめぐる課題である。ここではこの視点から，地域青年団運動と現代青年による地域づくりを分析対象として検討をすすめることにしたい。ところで，あらためて言うまでもなく青年教育実践は現在多くの困難をかかえている。この現状を考えると，地域づくりの主体形成の視点を青年の自立の課題と合わせて吟味するという発想自体が今日一般には認めずらい現実として映るであろう。しかし，とりわけ南九州・沖縄の地域青年運動と青年による地域づくりの実践に目配せしてみると，こうした分析に耐えうるほどの質を持っていることが明らかである。同様の傾向はここ数年の東北・北海道におけるいくつかの地域の現状分析からも指摘できる[注1]（資料１参照）。

九州・沖縄における諸実践も，他地域と同様の困難を抱えていることはいうまでもない。しかしここでは，青年一人ひとりが自分自身へのこだわりを大切にし，自分なりの自己形成と他者と共に地域に生きる生きがいの獲得を十分意識したうえで，地域・社会課題へのとりくみが具体化されている事例がみられる。そもそも近現代日本社会において，青年にとっての地域とは，そこから離脱

していくことによって，自由な自己形成を可能にしたり，青年世代としての個性や文化創造を可能にする対象でもあった。しかし高度経済成長時代をへて，地域における共同体としての質が大きく後退し，地域社会における自己形成の機会を十分獲得せずに幼少年期，青年前期（12・3歳から17・8歳頃まで）を過ごしてした現代青年である。今日，彼らにとって地域とは，子どもや高齢者など他世代との出会いの場であり，地域の豊かな文化との出会いの場ともなっている。また地域に生きる同世代との共感的関係を獲得し，地域に生きる生きがい感を実感し，深める場ともなっているのである。こうした社会背景と実践的な契機を見失ってはなるまい。以下，いくつかの象徴的な実践を紹介し，分析を深めていくことにしよう。

2．青年と地域との新しい出会いを生み出す実践

「祭り好き33%」「一生懸命28%」「まちづくり26%」「田舎23%」「熱血16%」「ダサイ」「古い」とは，青年団に入団して間もない青年の入団以前の青年団に対する印象のベストセブンである[注2]。まさに「地域で真面目に生きて，祭りや地域行事を行っているダサクて古い青年」がやっているのが青年団なのである。しかしそれは，地域づくりの主体形成の視点からいえば，ダサクて古いどころか，新しく求められる地域の青年像と言えるのかもしれない。その青年団は，1993年には全国3,259市町村中65.4%の自治体になんらかの形で存在していることが明らかになっている[注3]。これは，「青年団は青年自身のことしかやっていないか」とか，「弱体化し，地域や青年への影響力を無くしている」という一般の推論が，必ずしも妥当ではないことを示している。例えば，ほとんどの青年団は様々な地域行事を展開している。しかし，そのとりくみが多くの場合，地域を興すための事業として青年に自覚され，主体的で創意的な展開になっていないことが問題なのである。

鹿北町青年団の実践　熊本県の鹿北町青年団は，たしかに伝統的な地域青年団活動を継承しながらなのであるが，しかし同時に十分新しい質を持っている。18から25歳の青年25名（町青年人口の1割）で構成される地域青年団である。新しいのは，青年団活動に参加する青年の意識であり，子どもや高齢者などとの世代間交流活動が生み出す青年の意識である。そして多くの地域と同様に，地域生活を豊かにする諸行事が衰退し，変質した地域共同体の現実をこの青年団がかかえているという点である。鹿北町青年団のとりくみは，年間を通じて子どもや高齢者を対象にした行事，ボランティア活動など地域活動と青年相互の交流を深めていく活動を中心にして多彩である。注目されるのは，①サッカー大会・Kリーグ（21チーム，185名参加）を通じた小中高校生との交流活動である。また，②高齢者を招いて行う多彩な内容を持つ青年祭である。この青年祭には，日頃の他世代との交流活動の総てが生かされている。特に③この青年祭では青年団による一年間をかけて制作される自主映画が上映される。その内容は，地域に生きる青年の実感や生きざまをテーマにしたものである。また④町広報「幸の国」の2ページを使った青年団版掲載がここ40年ほど継続されていることである。このように鹿北町青年団の活動は地域のなかで青年世代固有の役割を発揮しながら位置づいているのである。

「新しい」と指摘した青年の意識とは次のごとく。「やっぱり，鹿北町に帰ってきたね。何もない小さな町だけど，“何か”があるからここを離れないし，帰ってきたんでしょう。一緒にその何かをさがしませんか。とにかく，“既成の楽しい”しか嫌，疲れることは嫌だとか，人間関係が嫌だとか言わないで，この鹿北町で楽しく生きるにはどうすればいいかを一緒に考えようよ。（中略）結局はこの町のためじゃなく，自分のためなんだよ。（中略）鹿北町について語ろうよ。」（青年団一同より，「町内に残っている若者諸君へ」，『町広報・青年団版』1994年1月号から）。ここには，町に残って生きていくことになった青年が，町のためにというよりも，自分にとって意味ある生活をつくりあげるために主体的なとりくみをしていこうとする意識が表れている。いかにも現在の青年らしくていいのである。まず自分があって，その次に地域が見えてくるという筋道なのである。そうした青年たちの世代間活動は，その感想として次のような意識を生んでいる。「毎年，青年祭を最後まで見てくれてありがとう。大の若者が，初めてみんなの前でポロポロと涙を流すのは，おじいちゃん・おばあちゃんの温かい拍手を聞くからです」と。ここには，Kリーグのとりくみを通じて，むしろ子どもに励まされている青年たちがいる。高齢者が感謝と感動で握手を求めて「また生きていたらくるけん」と言う姿に感動している青年たちの姿がある。そして，とりくみのなかでの感動は，地域にいる仲間の大切さを実感させている。「青年祭。フィーナーレの瞬間，今までの練習の疲れが一度に吹き飛ぶくらいに，心の底から頭の先までジーンとして，涙がわいてきました。こんな感動は，青年団に入って仲間とのとりくみがあったからこそ味わえた……」「仲間とこの地に生きる喜びがなければ，地域づくりなど始まるはずがない」と（以上，いずれも筆者のヒアリング）。

こうして鹿北町青年団では，何よりも青年の感性や願いが十分に反映したとりくみが具体化されている。そして，地域に生きる青年や他世代の人々とのとりくみを通して，他者や他世代に共感する自分をじっくりと味わいながら，地域に生きようとする自分自身の生きざまを確認していく青年の姿があるのである。それは，いかにも今日の青年らしい地域との出会い方なのである。

沖縄における若者の芸能・文化活動の展開　沖縄では「シマ」とは，集落としての「字」を示すことが多く，「島」そのものを示すこともある。「シマ」は，民衆の生活の場であり，ここでは年中行事として，豊年祭や盆行事などが行われている。いずれも芸能の担い手としての若者が大きな役割を果たす行事である。沖縄本島地域では盆行事に欠かせぬものが「シマエイサー」である。また，八重山地域では，盆行事のアンガマ（石垣市），豊年祭の旗頭や獅子舞で若者が大きな役割を担っている。いま沖縄では，こうした伝統芸能が青年によって復活されたり，新たな内容にデフォルメされて文化活動として展開されたりしている。また，「さんしん（三味線）文化」がロックやフュージョンなどと融合して新たな青年文化が創造され，マスコミなどを通じて発信されている。とりわけシマの芸能を担う若者たちの基盤は青年会であり，若者による芸能・文化活動の活性化は，青年会の復活や活性化を生み，地域における他世代，同世代との出会いを生み出している。また，エイサー大会や芸能・文化祭典など若者による新たな「祭り」が創出されるなど，芸能・文化活動が地

域の歴史や課題への青年の関心を深めていく契機を生み出している（補論参照）。

県都に隣接する人口約9万人の浦添市では，市連合青年会活動と字青年会活動が停滞していたが，いま地域の高校生や中学生を巻き込んで活性化しつつある。まず，市連合青年会は，解体状況であったが，連合組織に青少年育成部として高校生を中心にした「舜天雅（しゅんてんみやび）エイサー団」を結成し，勤労青年や高校生，中学生にエイサーを教えることを通して芸能の後継者養成を図っている。それは，同時に将来の青年会を担うリーダー育成のとりくみともなっている。近年の旧盆には，市内50カ所でエイサーを披露する「シマまわり」を実施，大都市部でシマエイサーが消失していた地域に伝統的な地域文化を復活させる担い手として活躍している。同じ浦添市内の一つのシマにある内間青年会は，22年間途絶えていたが，シマにエイサーを復活させたいという青年と地域の願いをもとに，シマエイサーを中心にとりくむ青年会として復活させている。ここでもエイサーの担い手の六割は中高校生である。青年会復活の中心になったリーダーのK君やM君は，県青年団協議会主催のリーダー養成塾・「明倫塾」に学び，実践を展開してきた青年たちである。彼らは中・高校時代に非行に走った自分自身を深く見つめ直すことで，地域の人々から信頼を得たいという願いを持つようになり，エイサーを始めている。シマのエイサーは「シマまわり」（字内をエイサーを演じながら練り歩くもの。これによって現世にやって来た御霊の総てを来世に送り返すウークイという盆行事。）を実施してこそ本領発揮である。そのためには，勤労青年だけでなく多くの若者が必要である。内間青年会では，青年達が非行をしている中・高校生をもエイサーに誘い込み，「シマまわり」のできる青年会に成長している。かくして非行している地域の中・高校生が青年会活動によって更生しているのである。さらには，この青年会のとりくみが，内間地区の地域生活に欠かせなかった大都市部の伝統芸能と盆行事を復活させていく重要な契機を生み出しているのである。

沖縄本島北部に位置する人口約3,500人の大宜味村は，地域の過疎化と高齢化問題を抱える自治体である。ここでは，字の青年会はほぼ消滅し，村に一つの大宜味村青年団がある。この青年団は，新たに改良した独自のエイサーの担い手である。彼らは，「青年夏まつり」でこれを演じてきたが，村の中央地域で行うまつりに出向くことのできない高齢者の要望にこたえて，「エイサー部落まわり」を村内の一七カ字総てに実施している。これは約一カ月間継続される一大行事である。このとりくみは高齢者をはじめ地域の人々から感動的に受けとめられ，数えるほどの世帯数になってしまった集落では，涙をこぼし，食い入るように演奏を見つめ続ける高齢者に青年自身が感動しているのである。こうして，この地域の青年たちは，芸能・文化活動を通して，地域の高齢化問題を解決する一つのとりくみを具体化している。同時に，このとりくみは過疎地域の盆行事を活性化ないし復活させる契機となっているのである。

芸能・文化活動と若者の自己形成　沖縄における若者の芸能・文化活動は，担い手としての青年自身の自己形成にとってはどのような意義を持つのであろうか。その象徴的な事例を八重山諸島の事例から分析しておこう。

石垣市字登野城のアンガマは字青年会がその総ての担い手である。このアンガマの主役は，遠祖

神のウシュマイ（爺）とシミー（婆）である。これを担当する役者は，方言を使い，あの世についての機知に富んだ問答を行わなければならない。したがって方言を知らない若者にとっては相当困難な役割である。登野城青年会の広報部長K君は1995年に初めてウシュマイを演ずることになり，旧盆の約一カ月前から方言と踊りの特訓をした。辛い練習ではあったが，本番を迎えると，方言と踊りを習得した自分に対する自信と行事に対する誇りを持てるようになったという。アンガマを継承し演ずることができるのは，その字の若者であり，青年会組織である。いま青年会が弱体化し，若者も地域の芸能に関心を持たない傾向が強くなっている。このなかで，とりくみはこうした体験を持つ青年を生み出しているのである。旧盆のアンガマ（これも，もともとは石垣市の中心地・「四箇字」を中心とする士族階層の行事であった）の他に旧暦六月に行われる豊年祭がある。豊年祭で旗頭を掲げる字白保（あざしらほ）では，約60kgの旗頭を持つことは若い男性の憧れの的であり，今日的に一人前として認められる意味を持つ。白保青年会のN君は，練習段階では持ち上げることのできなかった旗頭をそのハレの日に初めて持ち上げることができた。憧れの旗頭を掲げることによって，周囲の人々から認められ，彼は「地域のなかで一人前になれたという実感を持てた」と語っている。

このように沖縄では，若者の芸能・文化活動が，青年に地域との新しい出会いを生み出すと共に，青年自身の自己形成にとっても大きな意味を持っている。すなわち，各世代で構成される地域社会のなかで若者としての自らのアイデンティティーを獲得すると共に，芸能を通して人々がつくりあげてきた地域の伝統と歴史の重みを実感していくことである。ここで注目すべきは次の点である。そうしたとりくみが，古い形態のままに継承されているのではないということである。つまり，先に指摘した今日の意識傾向を持つ青年が，消滅傾向にある古い「芸能」や「青年会（地域青年組織）」に対し，それを今日的に新たに再生していく努力のなかで，青年自身の自己形成をすすめる体験を獲得しているということなのである。ここには，明らかに地域における芸能・文化の新しい継承方法とその担い手形成の筋道が示されている。

3．地域にこだわり生きる若者が生み出す「青年文化」の可能性

八重山の若い唄者（うたしゃ）たちと創作エイサー　八重山では，以上の芸能・文化活動を土台にして，新しく創造的な文化活動が青年の手の内から生み出されている。青年団員である平田大一（小浜島在住），島仲久（しまなかひさし）（黒島在住），また日出克（竹富島出身），新良幸人（石垣市白保出身），西泊茂昌（与那国島出身）などがそうした動向を代表する人物である。彼らはもともと，各島々に何処にでもいて，さんしんを奏で，創作曲をつくる唄者（うたしゃ）だということができる。それが今日的な青年らしい感覚の創作と演奏活動を継続することで，芸能をベースにした新しいジャンルを形成し，南の地域八重山から発信し始めているのである。島仲久は現在，竹富町，黒島の青年会長であるが，好きなさんしんと唄による創作曲がNHK沖縄「新しい沖縄の唄」にノミネートされ，『黒島ラブラブ』はこの地域の若者の愛唱歌になっている。平田大一は小浜島に在住し，竹富町青年団協議会の事務局長であ

る。彼は，両親と共に民宿を経営し，サトウキビなどの農作業をし，島の観光案内人を行いながら，青年会活動と芸能・文化活動を通した「シマおこし」にとりくんでいる。さらには，島のマンタ文庫に協力し「紙芝居三太郎」として地域の子ども文化活動にも参加している。例えば，日出克（ひでかつ）の『ミルクムナリ』（「弥勒の御成り」の意）という創作曲は，小浜島の豊年祭で演奏される芸能そのものがベースとなっている。平田がつくりだす「南島詩人舞台」は，踊りと唄，笛とさんしんとで構成されている。小浜島民謡に特徴的な笛は，彼が少年期，青年前期に参加した島の豊年祭で憧れ，身につけてきたものである。ミルクムナリに伴う独特の踊りは，同様に小浜島の豊年祭で踊られているものである（資料2参照）。

このように，彼らの創作と演奏活動は，八重山の島々の伝統的な芸能に，シンセサイザーや太鼓，独特の楽器（日出克の「古代ギター」等）によってロックやフュージョンなどの要素を加えながらデフォルメさせ，若者の新しいポピュラーソングを創造している。そうであるからこそ，これらの芸能は，地域の若者たちに受け止められ，若者に地域芸能への新しい関心を喚起しているのである。八重山において，現在この動向は一つのブームになりつつある。それは，沖縄本島のエイサーの場合でも同様である。本部町の「八重桜花団（やえおうかだん）」や名護市の「やんばる船クラブ」が，日出克などの新しい創作曲を駆使した今日的な創作エイサーを行う「琉球国まつり太鼓」（沖縄全域を対象にした半プロ芸能集団）の一定の影響を受けて発展し，地域の盆行事としての青年によるエイサー活動に弾みをつけていることと共通している。今日，この激しくダイナミックな創作曲に合わせて踊るエイサーは，沖縄の若者たちの間で一つのブームになっている。それが盆行事としてのシマエイサー復活に大きな影響を与えてきたのである。

鹿児島県知覧町のポスト青年団層による劇団づくり　ここでは，青年団活動を終えた若者たちが青年団という「オモチャを取り上げられたような寂しさ」を感じながら，地域の多様な層を集めての「劇団いぶき」づくりを展開している。ポスト青年団層が中心であるが，20歳代の青年の参加も多い。またこの劇団のとりくみは，全国青年大会などで多くの表彰を受けるなど高いレベルの質を持っている。それは，1996年初春には町の人口の約一割にあたる1,200名を集めて自主講演『奇跡・夢咲町商店街応援歌』を行い，町民から好評を博していることにも示されている。ここでも，あくまで自分の願いをベースにしたとりくみである。同時に地域に生きていくことを決断しているポスト青年団層の発想は確かである。劇団代表のM氏（元町青年団長，36歳）は，次のように述べている。「演劇はテレビと違って，地域限定の文化活動です。いっぺんに数万の人に訴えかけることはできませんが，地域の人々の喜びや悲しみ，そして地域のあるべき未来像などをメッセージとして伝えるには，最も効果的な手段だということが分かりました。」「地域が，その独特の感性で文化を創造しようとする力を失った時から，過疎は始まるんだと思います。（中略）守ろうとしていてはだめです。つくり出していこうとするエネルギーが文化を生み出し，芸能などを伝承させてきたということを忘れています」と（いずれも筆者のヒアリング（資料3参照）。そのM氏は，町の豊玉姫神社に伝わる「神舞」の後継者不足に対し，自ら踊り手を志願しその保存会のリーダーとしても

活躍している。

地域にこだわり生きる若者が生み出す「青年文化」の可能性は，何よりもまず若者自身の感性と願いをベースにしたとりくみが展開することが欠かせない。しかしそのとりくみが新たな「青年文化」を創造し，地域づくりへと展開していくためには，自分自身と地域の在り様についての深い洞察力が必要である。知覧町のとりくみは，ポスト青年団層（30歳代）と青年団層（20歳代）とが結んだ活動を展開することで，これを可能にしていることに注目しておきたい。

ところで，民衆にとって必要な文化とは，彼らが主体的・創造的に担う文化であり，そういう文化こそが民衆の地域生活を真に豊かにするという本質を持つ。それは，文化に対して受動的・客体的な存在の大衆が受け止める「大衆文化」とは本質的に異なる。「民衆文化」における文化表現とは，表現する対象の本質にせまる努力を通して表現者（主体）を鍛え，表現された文化の本質の豊かさによって人（客体）と人（客体）とを結ぶ力を生み出すものである[注4]。八重山に見る唄者（うたしゃ）たちのとりくみは，地域の芸能をベースにした創作によって，地域に受け継がれてきた人々の感性や願いの本質に迫り，そこに彼ら自身，現在の若者としての感性や願いの本質を反映させることで，表現をする主体とこれが受け取る客体との間に，そして客体どうしの間に「共感」を生み出している。これが現在のブームを生み出している要因である。唄者（うたしゃ）たち（主体）の「本質に迫る努力」とは，①さんしんや笛，踊りや唄などの演奏力量を鍛える努力であり，これまでになかった新しい楽器等を駆使するなど優れた力量を鍛える努力である。また②表現主体自身が生きる地域が抱える諸課題の本質を見抜く力量を鍛える努力である。エイサーや地域の芸能の担い手として活躍する青年たちのとりくみも，知覧町の劇団いぶきにかかわる青年においても，その程度の差はあるにせよ，このことは同様である。ここに，「青年文化」形成の可能性，それを支える青年の自己教育（自己鍛練）の本格的な展開，そして文化創造による地域創造の可能性が顕現しているのである。

4．現代青年が自立と連帯を築きあげるための二つの学習課題

「子ども」「高齢者」「芸能・文化」「ポスト青年団層」のキーワードを提示しながら，今日の青年による地域づくり実践とその担い手形成の課題と可能性を析出してきた。そこでは地域づくりの主体形成にとって，最も主要な青年の学習課題は，自分自身と地域の在り様についての深い洞察力の形成にあることを述べた。そこで地域づくりの主体形成の視点から，現代青年が自立と連帯を築き上げるための二つの力量を形成する学習課題を整理しておこう。

第一の力量形成　今日の青年に見られる個人趣向は，集団や社会からの孤立傾向を伴っている。この傾向が問題なのは，自分と社会への「見切り」意識を生み出していることである。これを青年に見られるアノミーやアイデンティティ拡散問題として指摘することもできる。これを克服するためには，青年が自分自身の願いをベースにして他者と共に創造していくことの喜びや感動を味わう体験を獲得することが必要である。それは，青年に他者や集団，そして社会への「信頼」と「共感」

を蘇生していくであろう。それは，今日の青年に必要な力量形成の課題なのである。この意味で，すでに検討したように，地域にかかわる諸実践は，青年の感性や願いをベースにすることを十分大切にして，青年と地域との新しい出会いを生み出すものとして幾重にも展開されることが求められるのである。いわば，地域に関わる様々な内容の実践を通じて，青年の自己実現を可能にしていくような考え方である。そのことが現代青年にとっては第一義的に必要な力量であることが確認されなければならない。したがって，地域課題の解決やその担い手になり得る力量を持つことや構想力，行動力を持つことを一面的に強調することは，むしろ効果的ではないということである。

第二の力量形成　青年の意識のなかには，青年集団の豊かさや可能性への「見切り」意識が存在している。また，地域に生きぬく「意志と力量の未形成」の問題がある。さらには，地域づくりと住民自治活動への「失望」がある。これを克服するためには，集団や仲間，そして青年組織を通じての様々な活動体験，特にそこでのリーダーとしての体験の持つ意義が大きい。したがって地域青年集団におけるリーダーへの形成とリーダーとしてとりくむ諸実践を通じて，次の諸能力を獲得していくことが必要である。まず学習と実践への「意欲」の獲得である。また，他世代の実践への「共感」と地域に生きぬく「意志」の獲得である。そして，集団内でのリーダー体験を通じた「自治的能力」の形成である。さらには実践体験と地域・社会に関わる学習とに裏打ちされた「地域認識」と地域に生きる「見通し」の獲得である。

青年団活動とリーダー養成学習の意義　ここで，青年団における日常のリーダー体験を持つ青年のために，彼らの本格的なリーダーへの形成を目指してとりくまれる学習活動に注目したい。今日ポスト青年団層（30歳代）の地域おこしの現状を見ると，例えば鹿児島や沖縄においては，青年団活動体験者が多く，青年団リーダーの本格的な養成は，地域づくりの主体形成にとって軽視することはできない存在である。特にここで扱った実践事例に関わる地域においては，鹿児島県青年団協議会のアクティブセミナー，および奄美アクティブセミナー，沖縄県青年団協議会の明倫塾，八重山圏域の人塾・八重山などがある。これらのとりくみは，第二の力量形成を保障する意図的な実践として位置づいている。その詳細は別稿に譲ることにしたいが[注6]，学習内容編成についてのみ若干紹介しておこう。まず①参加した青年個々人がかかえる青年期の課題や青年団を通じた実践体験などを自由に語り出し，課題を吟味していく「課題解決学習」としてのグループゼミである。また②個々の青年がかかえるであろう課題に対応させた地域や社会の課題，青年像，青年論などを系統的に学ぶ「系統学習」である。そして③青年団ＯＢや地域づくりの担い手に学ぶ「先輩激励講義」である。さらには④参加青年が自治的に展開する交流活動である。いずれにしても，こうしたリーダー養成のための学習活動はその場のみで完結するものではない。修了の後にも，地域での具体的な実践を通して何度も検証し，そこに明らかになった課題解決のための学習を継続していくことが必要である。その実践と学習を検証する場が，青年団などでとりくまれる青年問題研究集会や「若い女性の集い」などである。

5．小　結　― 青年教育行政とポスト青年団層，地域に生きる総世代の課題 ―

第一と第二の力量形成の課題は，具体的な実践においては，相乗効果を発揮しながら展開していくことが多い。例えば，大卒青年の場合は，第二課題においてかなりの蓄積を持っていることも多いだろう。彼らにとっては第一の力量形成が課題となることが多い。筆者の実践では，第一課題の克服が，同時に地域に生きる「意志」の獲得へと展開し，第二の課題に突き進んでいく青年もいた。いずれにしても，第一と第二の力量形成のための学習が総合的に計画化されていくことが必要である。その場は，青年団組織のように地域青年団体の中である場合もあるが，基本的には，公的な社会教育・生涯学習行政のなかで具体化されていくことが求められる。行政では，団体への援助を通して共催でこれを進めていくことも可能であろう。また，青年を対象とする講座などにこうした視点を入れて計画化していくこともできよう。鹿児島の奄美アクティブセミナーのように，国立大学の公開講座と共催してとりくむことも可能である。そのコーディネートを自治体の社会教育職員や青年団体リーダーがすすめなければならない。いずれにしても，青年自身がその計画づくりの主体として参画していくことが欠かせない。ここで紹介した実践はいずれも青年主体のとりくみであった。しかし現在，青年教育行政において，社会教育主事などに力量のある職員が少ないことや，講座への参加者を獲得しずらいと考えられることが原因で，青年の自立や生き方，そして地域づくりの主体形成などを学級講座のテーマにできない現状があることは考慮しなければならない。それは青年教育行政の課題である。したがって，ごく現実的な提案をすれば，やはり青年団体自身が主催し，行政による財政を含めた援助をうけながら具体化していく発想が必要であろう。結果として，団体リーダーやＯＢ，助言者の役割は大きいといわなければならない。

また，各地の実践が示すように，地域課題に関わる青年の実践活動が意図的にとりくまれる必要がある。そして青年のとりくみが有効に展開し，課題解決へと進んでいくためにも，またとりくみを通じた青年の体験の質が深まり，自己形成をすすめる学習の質が深まっていくためにも，ポスト青年団層のとりくみと連携ないし共同していくことが重要である。この意味ではポスト青年団層の地域課題にとりくむ組織と実践を育てていくことは求められている。いずれにしても，青年の地域活動を育て，青年を地域づくりの主体へと形成する学びを十全のものにしていくことは，地域の総世代的な課題であることが，今とりわけ強調されなければならない。現在の地域づくり主体のすぐ後の担い手は，ほかならぬ地域青年そのものだからである。しかるに，このことの自覚は現在十分ではない。

註

1．その典型事例は北海道の八雲町，「若人のつどい」である。日本青年団協議会編『第40回全国青年問題研究集会報告書』の青研特別分科会小林報告（1995年）などが参考となる。

2．日本青年団協議会調査，1994年。

3．日本青年館青年問題研究所調査結果，1993年。

4．北田耕也『大衆文化を越えて』国土社，1986年5月，など参照。

5．小林平造「青年が世界を読み取り，歴史を綴る筋道」『月刊社会教育』1993年5月号，国土社。同「地域づくりの主体形成と青年に関する研究」『鹿児島大学教育学部紀要』教育科学編第47巻1995年度。同「現代若者論」『あきた秋田青年公論』第68・69号，秋田県青年会館，1993年度3月，P12〜41。など参照。

補論・地域文化活動が生む若者たちの新しい力

― 沖縄における若者たちの芸能・文化活動の動向とその意義 ―

小 林 平 造

はじめに

表題にあえて「新しい力」と置いた。若い世代の憂慮すべき動向を考慮すれば,「このように言ってしまっていいのか」と問われるかもしれない。しかし，いま，日本の南と北の地域（沖縄や南九州，そして東北，北海道）で，地に足をつけながら歩もうとしている若者たちをじっくりみていると，このような印象を持つのである。それは地域の文化芸能活動にとりくむ若者たちのことである。私にとっては，まず沖縄が面白かった。そして南九州，東北，北海道へと視野が広がったのである。

高度経済成長以後のわが国の地域社会は，そして地域の文化も芸能も，若者たちの自立や自己形成にとってあまり大きな意味を持つものではなくなった。この時代の若者にとっては,「地域」や「地域文化」は,「他国」や「歴史」,「宇宙」などと同様の意味を持つのかもしれない。つまり，いま若者たちにとっては,「地域」や「地域文化」とは，新たに出会い，その面白みを発見していくような，まるで「異国」に関心を持つような対象なのかもしれない。だから自然に継承・発展するものではなく，意図的に実践的にはたらきかけていくことが，今必要なのである。そのことが若者の先行世代に自覚されていないのである。ここでは沖縄を紹介しておこう。いかにも今の若者らしい感性をベースに「新しい力」が生まれつつあることが理解できよう。

一．子どもを育てる若者の芸能・文化活動（浦添市）

沖縄本島の南部に位置する浦添市は，県都那覇市に隣接し，県内で第３番目の人口を擁する都市である。青年人口の割合も高く，1990年の調査では総人口の約25％を占めている。浦添市には現在,市青年連合会をはじめ５つの字青年会が*エイサーや地域芸能を主体とした活動を行っている。

大方の都市型青年団に見られるように，浦添市青年連合会もまた青年の地域離れによって，活動内容の停滞を余儀なくされた時期があった。しかし，浦添市青年連合会は，７年前に子供会ジュニアリーダー出身の青年によって再び結成され，新しく青年会リーダーの育成や青少年健全育成に力を入れてきた。この青年連合会には，青少年育成部がある。この青少年育成部には，高校生を中心

＊エイサー：沖縄本島の各地で行われる盆行事の芸能。踊りの形態は様々であるが若者（多くは男子）が太鼓，しめ太鼓，鐘などを打ち鳴らしながら「えいさー」の掛け声と共に踊り歩く，現世にやって来た来世の御霊をなぐさめる行事である。囃子言葉としての「えいさー」からきた名称である。

にした「舜天雅（しゅんてんみやび）エイサー団」が一昨年結成された。これは，青少年健全育成の具体的な方法として，エイサーに着目したものである。舜天雅エイサー団では，青年が，高校生や中学生にエイサーを教えることを通して芸能の後継者育成を図り，同時に将来の青年会を担うリーダー育成を行っている。昨年の旧盆は，市内50ヵ所でエイサーを披露する「シマまわり」を行い，地域の芸能・文化活動に関わるとりくみを展開している。こうして，高校生や中学生は，身近で頼りになる年上の青年との出会いや交流の場を獲得している。また彼らは，地域の青年から前向きな生き方や生活態度を学び，勉強の指導も受けている。この地域では，青年が高校生や中学生などに対する子育て活動の担い手になっているといえるのである。

浦添市の内間地区にある内間青年会は，22年間途絶えていたが，エイサーを地域に取り入れることで4年前に復活した青年会である。彼らはエイサーを市内の牧港青年会から習い，青年会同志の交流も活発に行っている。その中心となったK君は，県青年団協議会主催のリーダー養成塾・「明倫塾」で多くを学び，実践してきた人物である。彼は，中学，高校時代に非行に走った自分を深く見つめ直すことで，地域の人々から信頼を得たいという願いを持つようになり，エイサーを始めている。内間青年会では，青年に限らず，高校生や非行少年達をエイサーの仲間に入れ，共に活動するとりくみを展開してきた。こうして地域の子育て活動を担う青年会として再生していったのである。

二．芸能・文化活動で高齢者と新たな出会いを生み出す若者たち（大宜味村）

沖縄本島北部に位置する大宜味村は，高度成長に伴って急速な人口流出を招いた過疎の村である。現在も高校を卒業すると進学又は就職のため，青年が都市へと流出していく。人口に占める青年（18〜30歳）の割合はほぼ1割で，高齢化が大きく進んでいる地域でもある。かつては17の各字に青年会があったが，現在は字喜如嘉と字大保だけに青年会がある。こうして，村の青年会としてのほとんどの活動は，村全体で一単位組織の村青年団協議会が行っているのである。大宜味村青年団協議会の主な活動には主催事業の「青年夏まつり」がある。そのアトラクションとして，12年前に字根路銘（あざねろめ）からエイサーを習い，現在では大宜味村独自のエイサーとして定着するに至っている。

3年前から，村青年団協議会は夏祭りにやって来ることのできないお年寄りの為にエイサーを披露しようと，「エイサー部落まわり」のとりくみを始めた。青年たちは3週間かけて村内17字でエイサーを踊るが，このとりくみはお年寄りから感動的に受け止められている。こうして，この地域の青年たちは，芸能・文化活動を通して，地域の高齢化問題を解決する一つのとりくみを具体化している。同時に，このとりくみは，過疎地域の盆行事を活性化ないし復活させる契機となっているのである。

三. 方言や地域文化が若者に「一人前」とこの地に生きる意味を教える（石垣市）

沖縄本島の旧盆にエイサーが行われるのと同じように，八重山諸島ではアンガマが行われる。もともと，石垣市の中心地・四箇村の士族階級層の行事であったが，明治末頃から農民層も行うようになり，現在では字の青年会が担う芸能の一つとなっている。

石垣市内には８つの字青年会と市の青年団協議会がある。どの青年会も地域行事と密接な芸能を継承・発展させており，青年会活動と深く関わっている。石垣で一番大きい字，登野城のアンガマは字青年会が全てを担っている。このアンガマの主役である遠祖神を，ウシュマイ（爺）とシミー（婆）という。この主役を担当する者は，方言を使い，あの世についての機知に富んだ問答を行わなければならない。したがって，方言を知らない若者にとっては相当困難な役割なのである。登野城青年会，広報部長のＴ君は，今年初めてウシュマイを演じることになり，旧盆の約一ヵ月前から方言と踊りの特訓をした。辛い練習ではあったが，本番を迎えると，方言と踊りを習得した自分に対する自信と行事に対する誇りを持つように変わったという。このように，芸能・文化活動は，芸能を継承するということばかりでなく，青年自身の成長を促すものになっているのである。

おなじ石垣市の字平得（あざひらえ）では，字の芸能を復活させることが土台となり，平得青年会も復活したという経緯がある。約10年間途絶えていた青年会が復活していった原動力となったものが棒術とアンガマであった。継承者のいない棒術の保存を望んでいたＨ君は，沖縄県青年国内研修に参加して，他の地域の青年会関係者と出会い，学びあうことで，青年会復活の必要を自覚し，これに取り組んでいる。かつての青年会ＯＢを担い手とするアンガマ愛好会もその後継者の必要性から青年会の復活を強く望んでいた時であった。こうして，1992年に会員12名で平得青年会は再結成されている。芸能の復活と共に青年会も復活し，地域の活性化へとつながる動きである。アンガマや棒術，獅子舞などの伝統芸能は，厳しい動きと体力を必要とするため，その担い手とする青年ならではの芸能である。この地域では，青年会に集う青年たちによって伝統芸能が継承されているのである。それは，古い青年会と芸能が古いまま復活したのではなくて，明らかに，今日的に新たに，青年会という地域青年組織が再生し，古くから伝わる芸能の新しい継承方法と担い手が形成されたことを意味しているのである。

八重山諸島では，旧盆のアンガマの他に大きな行事として，旧暦６月に行われる豊年祭がある。豊年祭で旗頭（はたがしら）を掲げる字白保では，約60kgもある旗頭を持てる男性は憧れの的であり，今日的に「一人前」として認められる意味を持っている。白保青年会のＮ君は，練習では持ち上げることのできなかった旗頭をそのハレの日に初めて持ち上げることができたという。憧れの旗頭を掲げることによって，周囲の人々から認められ，彼は「地域の中で一人前になれたという実感を持てた」と感動的に語っている。

ここには，伝統芸能を継承する諸活動が持つ現代青年への自己形成力を見て取ることができる。

四．エイサーの今日的変形・発展と地域の盆行事，エイサー，青年団の復活（本部町，名護市など）

近年沖縄では，従来の伝統芸能を継承しながらも，若者の新しい感性を取り入れた創作芸能のとりくみが顕著に見られるようになってきた。その中の一つ，県内外で活躍する「琉球國祭り太鼓」は，1982年に結成され，県内外に支部をもつ総勢三百人以上の会員を擁する太鼓集団である。この団体の諸活動は，若者による伝統芸能のとりくみに大きな影響を与えて来た。

一方，琉球國祭り太鼓の影響を受けながらも，地域に根ざした芸能・文化活動をしようという動きが出て来ている。例えば，本部町のもとぶ八重桜花団，名護市青年団やんばる船倶楽部などである。これらのとりくみは，地域の青年会を活性化させる契機を生み出してきている。

もとぶ八重桜花団は，琉球國祭り太鼓で4年間の経験を持つMさんを中心に青年相互の交流と地域の活性化・人材育成を目的に結成された，新しい創作エイサーの団体である。この団体の活動が，本部町の青年会に与えた影響は大きく，現在，停滞気味だった青年会の活動が再生するという動きにまで発展している。もとぶ八重桜花団は，地域の活性化を図るために，地域の行事を重視している。旧盆になると，団員は各字でのエイサーにとりくんでいる。こうして，字東や字谷茶では，字のエイサーが復活し，同時に青年会が活性化してきた。東区青年会は，ここ4年間活動が低迷していたが，今年の旧盆には，40名規模でエイサーを演ずる道行を行った。こうして東区では，盆行事が盛大に行われることになったのである。手踊りエイサーは，沖縄本島北部地域に根づいてきたものである。東区の伝統的なエイサーも，この手踊りエイサーだったが，この度のエイサーの復活に際しては，パーランクーを使ったエイサーを取り入れ，この地域に無かった新しいエイサーを定着させようとしている。谷茶区青年会も，同様に，もとぶ八重桜花団の団員が中心となって4年ぶりに旧盆のエイサーを復活している。「シマおこし」をめざすもとぶ八重桜花団の活動は，本部町を町内外にアピールするものであり，また町内の青年会を活性化させる役割を担っていると指摘することができる。

1992年に結成された名護市青年団やんばる船倶楽部も，創作エイサーを主体として活動する青年団体である。これは，従来の青年会の枠に捕らわれない，極めて解放的で柔軟な団体である。また，エイサーと獅子舞を中心に市内外のイベント出演の他，芸能文化の継承，青年相互の交流などを行っている。

名護市では，これまで，青年会の衰退が続いていた。同やんばる船倶楽部は，芸能活動や交流事業を通して，異種の青年団体との横のつながりを大切にしてきた青年団体である。これは，同やんばる船倶楽部を中心に，様々な青年ネットワークが名護市内に広がることで，やがて市内全体を一つにネットワークする青年団組織になることを意図したとりくみでもある。

ま と め ― 地域の個性に出会い，若者を鍛え，シマをおこす芸能・文化活動 ―

以上述べたように，沖縄各地で展開している若者の芸能・文化活動は，盆行事や豊年祭でのとりくみがその典型である。これらは，字ないし集落での活動が基本であり，沖縄における若者の地域文化活動総体のベースになっている。こうしたとりくみが活性化していくことで，近年，市町村エリアで，若者たちを中心にしたエイサー大会や芸能文化祭典が各地で開催されるようになっている。例えば，沖縄市，具志川市，大宜味村，読谷村，名護市，浦添市，石垣市，那覇市，恩納村などである。

これらは地域によって個性的に展開されているが，とりくみには次のような成果が生まれている。第一に，若者が地域の芸能・文化を継承していく担い手となっていること。第二に，それは特に地域の青年会組織を媒介としていることから地域青年団活動を強化していく役割を持っていること。第三に，字単位の青年会による芸能・文化活動をこえて，市町村自治体エリアのとりくみとなっていることから，青年団や青年団体ネットワーク組織，連絡協議体の具体的な役割を明らかにし，青年団や青年団体の連絡協議組織の結成とそれを強化していく役割を持っていること。第四に，浦添市や沖縄市に典型的なように，自治体エリアでの，青年による中高校生を対象とした子育てのとりくみとなっていることである。そして第五に，以上の四点の意義を持ちながら，総じて，若者による地域づくり，「シマおこし」の具体的な内実と切り口を生み出していることである。

鹿児島大学教育学部研究紀要　教育科学編　第48巻（1997）

資料 1・「青研集会づくりは現代若者の地域青年団運動をきりひらく

― 青研を軸にした高知県団の活性化，北海道八雲町では町青研集会が「地域づくり」をすすめる地域青年運動の要になっている ―

小 林 平 造

資料の説明

これは，日本青年団協議会が毎年度3月に開催する「全国青年問題研究集会（略称全国『青研集会』）」のうち，1995年3月の第40回全国青研集会の特別分科会まとめである。この特別分科会は，全国各地の青研集会とこれを集約する全国青研集会とが諸問題を抱えるなかでその解決のための方途を探っていくことを目的として，特別に設置した分科会である。

ここでは，成果を生んでいる各地の青研集会の内容と，特に北海道八雲町における若者による「地域づくり」の動向と若者が壮年世代と共に行う町の青年問題研究集会の内実を理解することができよう。

1.「青研拡充」のとりくみと特別分科会の成果について ― この10年の経緯 ―

マスコミの造語としての「新人類」論が登場（1984年）してほぼ10年目を迎えた。日本青年団協議会（略称「日青協」）の青年問題研究集会を拡大充実させていくとりくみ（略称「青研拡充」）は，この10年間に対応していたといってよい。そこでは，新しい社会状況とその社会を生きる現代若者の本質をとらえ，新たな共同学習（その集約点としての青研集会）をいかに現代化させていくか。このことが問われていたのである。

共同学習や青研集会とは，戦後わが国の地域青年団運動にとって①欠かせぬ学習の場であり，また②日常の実践を客観的にとらえ返す学習を通じて，（仲間づくり」や「地域づくり」，そして様々な社会活動など）青年団運動の発展の筋道を明らかにしていく場であった。したがって，この10年間の「青研拡充」のとりくみは，共同学習や青研集会のとりくみが今日の青年団運動をいかに支え，活性化していく力になるのか。このことをも明らかにしていくことが問われていたのである。

日青協の「青研拡充」のとりくみは，以上のような大きく二つの問題に解答を与え，それを運動化することが課題とされていたといっていいだろう。そのために，まず「青研拡充」のための答申が作成され，全国の仲間との共同討議に基づいて「青研パンフ」が作成された。そして6回目を迎えた全国青研特別分科会は，答申内容の実践化の筋道を探り，答申内容を吟味し深めていく分科会

として，これまで位置づけられてきたのである。この6年間のとりくみは，概して，かなり生産的であったということができる。呼びかけに応えて特別分科会に参加し，青研集会づくりにとりくんだ道府県や郡市町村などの青年団組織で，意図的なとりくみが成果を生み出してきたからである。6年間の経緯を簡単に振り返っておこう。

① 1989年度（35回）から2年間は，答申の内容を確認し，実践を模索している状況であった。90年度に分科会参加者が30名をはるかに越えたことも特筆すべきことであった〔実践模索期〕。

② 91・92年度の2年間は，郡市町村と県の典型的な実践が生み出された時期である。八頭郡での成果，そして鹿児島，香川，高知で3・4年かけた地道なとりくみが成果を生み出してきたのであった〔典型実践生成期〕

③ 93・94年度の2年間は，青研集会の重要性が各地に認識され，各県の青研集会が量的にみて拡大傾向を示してきた時期である。また，郡市町村青研集会の重要性が各県に認識され，県青研集会のとりくみと共に郡市町村青研集会づくりが実践化されてきた時期である。さらには，各青研集会のとりくみを報告する実践レポートに本格的なものが出てきて，このレポートに関する討議を通して，青研集会レポートの質に関する論議が深まりを見せてきた時期でもあった。但し，これらもまだ「青研拡充」の本来の具体化という点から考えれば，まだまだその初期段階を形成したに過ぎない状況だと言っておこう〔成果が各地に広がりつつある時期〕。

以上がこの6年間の経緯である。それにしても，日青協と各道府県団とが青研集会のとりくみの重要性を認識し，初夏の「ヤルゼミ（・活動者研修会)」で研修し，全国青研集会特別分科会で実践を持ち寄り，地道な論議をくりかえしていくという努力が，こうして確実な成果を生み出してきていること。このことの重要性を特に指摘しておきたい。青年団運動が全体的に弱体化している今こそ，こうした①意図的で長い見通しをもった②地道な取り組みを継続していくことが，全国の青年団運動に成果をもたらすのだと言いたい。

2．今年（1994年度）の特別分科会論議と青研集会づくりの全国的な特徴

今年の分科会討議は，これまでの成果を引き継ぎ，何といっても，青研集会づくりが青年団運動そのものを活性化していく力を持っていることが報告された点で印象的であった。それは，現代青年の質に関わって，「語り合い，見つめあうこと」が，新たな意味で課題であり，青年の要求になっているということなのだ。例えば，次のごとくである。高知県団は5年程以前に「混迷・停滞」と言う方がふさわしいような状況にあったが，県青研集会の立て直しをベースにして県団の役員体制を整え，リーダー養成の龍馬塾，県女性の集いなどを新たな取り組みとして成功させてきている。ごく正常な県団として立ち直ったのである。北海道八雲町「若人の集い」は，20代層と30代から40代層までを構成メンバーとする地域若者集団で，実に内容の濃い「地域づくり」活動を展開している。この集団が活動の軸に町青研集会を位置づけており，毎年このとりくみが団体内の相互理解と特に20代層の青年の成長と団体活動への主体的参加を生み出す力になっていることが明らかである。

先に，昨年と今年を〔成果が各地に広がりつつある時期〕として特徴づけたが，全国的に見ると，決して大幅な飛躍とは言えないものの，鹿児島，香川，高知，鳥取などにみられる県青研集会づくりの成果が広がりを見せてきている。①まず特に注目できる地域がある。群馬県は昨年の41名から今年65名へ，同様に静岡県は30名から89名へ，滋賀県は60名から83名へ，宮崎県は37名から68名へと明らかに参加者数をおいて増加している（今年の数値は県団役員数を含んでいる）。②次に，①ほどではないが，明らかに状況が好転してきている地域がある。北海道，石川県，長野県，奈良県，愛媛県，福岡県，熊本県，大分県などである。

但し，昨年と比べて11県団で参加数が減少していることも指摘しておかなければならない。こうした県団には，1で指摘した諸点を特に深く吟味してほしいのである。とりくみの構想と地道な努力を継続していけば，必ず成果を生み出せることが，既に多くの県団の成果に示されているからだ。

3．今年の論議の成果

1）青研集会立て直しへのきっかけを必死な努力でつくり出した地域

「けっきょく，目標の半分以下の10人しか参加してもらえませんでした」という広島では（それは県青研集会としては，最低の状況と言ってもいいほどなのである），それでも，会長他役員と日青協や助言者の協力のもと，次のような感想を言わせる成果を生み出している。「『緊張感のあるなかで，自分のことや仕事のことをしっかり皆に分かってもらうように話すことは刺激的で楽しかったし，たまにはシリアスな話をするのもいいもんですね』と意外な反応でした。しかもこれに触発されてこの全国青研にも参加したのです」というのだ。広島では，目標通りの参加数を獲得できなかったが，やや開き直って，「それなら，形式的にぎこちなくやるよりも，とことん語ろう」ということを提起し，鍋をつつきながらの語りの場をつくりだしていったのである。参加者を募っていた段階では，石田会長自身にも，青年たちのなかにもマジメになって話すことへのシラケ気分があった。だから語ることの大切さを十分に訴えることができなかったのだという。しかし，今回のとりくみは予想以上の成果を生んだのであった。高知県や八雲町のとりくみを中心にした論議に参加して，石田会長は「こんなにまでして語りあいの場づくりをするのかと思わせられた」と感想を残している。また，県教育委員会青年担当者として参加した藤原氏は，「サークルと青年団の違いがよくわかった。高知県などのとりくみから足でかせぐことの大切さがよく分かった」と感想を述べていた。このように，担当者自身が「語り合い，見つめあい」することの今日的な意義をつかみだしていくことが何よりも大切なのである。要は，青年団リーダー自身の青研集会に対する意識を変えていくことが第一の課題なのである。青研集会で感動したという体験を持たないままに担当者になっているということが多いのではないか。これをどう乗り越えていくか，石田レポートは一つの答えを提示している。高知県も5・6年程前はこうだったのだ。めげることはない。広島の来年に期待したい。

2） 市町村青研とネットワークしていくことで県青研の充実へ

山形県団からは，かつて〔典型実践生成期〕に高畠町からの町青研集会へのとりくみレポート，昨年は，南陽市から中村レポートなどが印象に残っている。青研集会の良さを伝統的に保持している地域なのである。しかし，そうした地域にある力量が，県団活性化に結んでいない。このことをふまえての今回のレポート参加であった。平田町，朝日町，米沢市三地域からのレポート，そして県団から遠藤レポート。市町村青研３本を県青研レポートと共に持ってきたのは，山形が初めてであった。山形県団は，今年度，活動家養成講座「ＢＡＳセミナー」をなんとか成功させ，県青研集会は昨年よりも良い状況を生み出している。遠藤レポートが言うように，「土壇場で，不信感を持ってはいたけれど，今，この県団役員と踏ん張らなければ，山形県団おしまいだぞ」という思い，そして「喜怒哀楽を共にできる仲間づくり」の大切さをあらためて自覚，このようなことに気づき出している。①なによりも，成功させることのできるとりくみ（ＢＡＳセミナーと県青研集会）をつくり出したこと，②県青研集会充実への筋道は，山形県の特徴である市町村青研を活性化させ，これとネットワークしていくことにあると気づいたこと，③県団リーダーと市町村青年団リーダーどうしが信頼関係を築いていく必要を自覚したこと，この点を評価したい。市町村からの３本のレポートを持っての参加はその意味において次へのとりくみの筋道として重要であった。米沢市の小林レポートも，自分自身の課題を深く見つめた内容になっており，今後どのような内容の充実を図るかを明らかにしている。今後に大いに期待したい。新たに青研集会を復活させた平田町，そして朝日町が今後今年の成果をどう発展させていくかについても期待したい。青研集会は，県青研集会のみで評価されてはならない。青年団員一人ひとりが日常活動を発展していく市町村の地域においてこそ「語り合い，見つめあうこと」は本物になっていくのである。市町村のとりくみをネットワークし，県青研集会を本物にしていくとりくみの筋道（「積み上げ青研」）を具体化しつつある山形県の努力に大いに期待したい。そのためにも，県内の本格的な青年団リーダーを生み出すＢＡＳセミナーの充実は欠かせないであろう。

ところで，ここ２・３年は県青研集会と共に市町村青研集会のレポートを提起してくる県団が目立ってきている。鳥取県と八頭郡，鹿児島県と末吉町，高知県と土佐清水市，などである。各道府県のとりくみが，郡市町村の青研集会づくりに結んでいく筋道が新たに模索されてきていることも昨年，今年の重要な成果である。

3） 市町村青研はいまを生きる青年の地域青年運動をひらく

北海道八雲町，河野レポートは圧巻であった。既に指摘したように，20代を中心にした青年団層だけでなく30代40代層が加わっての青研集会の醍醐味を十分に教えてくれる実践であった。20代層のとりくみを壮年世代が見守りながら，共に支え合いながらのとりくみはどう具体化できるのか，その筋道を教えてくれるとりくみといえよう。第一に，「若人の集い」は，地域づくりのとりくみを年間を通じて展開している。北海道三大あんどん祭りとして評価されるようになった八雲山車行

列，環境庁が全国第二位の清流として評価するユーラップ川の環境保護を考えるユーラップフォーラム，クリーンウォーク，そして地域おこしフォーラム，さむいべや祭り等々，壮年世代と20代層とが共にとりくむ地域づくり活動を展開している。それは，今日の20代層が本格的な地域づくり活動を展開する道筋をも教えている。第二に，そうした町づくりの見通しを明らかにし，20代層を育てていくためにも，町青研集会が位置づけられている。この青研集会のとりくみにはいくつかの特徴がある。①徹底して全国各地の青研集会の成果に学んでいることである。そのために長野県や高畠町などの青研集会に毎年青年を派遣してきた。②青研集会のとりくみは20代層が担当することとし，年間を通じたとりくみが展開されること。特に2月の開催を前に11月からのとりくみは，ほぼ2・3日に一回は何かが取り組まれているような内容となっている。徹底して青研集会を準備していくのである。③そして，既に指摘したように壮年層と青年層とが共同で青研集会当日をつくりだしていることである。④6つの分科会には，それぞれ恒常的に助言者が位置づけられ，地域づくりの担い手や北海道内の大学などから，毎年参加してもらっている。

第三に，今年の町青研集会で特に大切だったのは，青年層と壮年層との意識のズレが克服される場になったことである。分科会の討議は分科会だけに終わらず，一泊二日の青研集会終了後にも二日目の夜，たまり場になっている山車保管庫にほとんどの20代層が集まってしまった。そこでは，実行委員長の青年までが，これまで仲間の中で語ることのなかった自己語りを展開していた。互いの持っている課題を仲間のなかで語ろうと励ます事務局長もいる。ここ半年の青研集会づくりの辛さや地域に生きること，そして自分の生い立ちのなかにあるこだわりや劣等感などが次々に語られたのであった。この時，助言者や司会を引き受けた年長の人たちも目頭を熱くしながら青年の語りに対して共感の語りを展開していた。この二日目の夜が象徴的であったが，20代層のこうした語りは，彼らが本当に望んでいたことなのであった。地域づくり活動や諸とりくみが活発に展開されていく「若人の集い」ではあったが，諸活動を通じて彼らがあと一つ本格的なとりくみを展開しえないでいたその問題が見えたという印象である。つまり20代層の基本課題は，自らの生き方を明らかにしていくことにあった。そのためには，こうして他者と共に自己凝視を展開していくことが必要だったのである。その自己凝視は，一人ではできない。経験豊かで青年の信頼に足りる地域の壮年層の存在はここで大きな意味を持っているのである。20代も，30・40代も共に共感的な人間関係を紡ぎ出しながら，ごく若い青年たちの自己凝視が深まっていくのである。青年として，この地域にいかに生きていくのか。この20代層の課題を壮年世代が共にみつめていくことを可能にしているところに，八雲町青研集会の注目すべき要素があると言いたい。このことに気づきだした今年の町青研集会であったと指摘しておこう（筆者は，この町青研集会とこの場面に参加していたことを加えておく）。

4）「語り合い見つめあう集い」づくりが高知県団の組織再生の筋道を具体化した

高知県団レポート（山田，小松，依光）は，圧巻であった。高知の場合，「語り合い，見つめあう集い」というのが最もふさわしいようなとりくみであった。4・5年前の高知県の状況を見れば明

らかなように，このとりくみを通して，正に高知県団組織は立ち直ったのであった。その当時の県会長，森君は，自分自身が県団の仲間から信頼されていないことを知った事務局長時代に，自らの生きざまについても深く悩んでいた。その大きな解決の場は，日青協「清渓塾」であった。6日間の学びを通して彼がつかんだものは，「信頼できる青年どうしの暖かさ」の大切なことであった。「共感的人間関係」づくりは，ここから始まっていった。高知に帰り，県団の仲間にこのことを告げ，まず県団のなかで「語り合いみつめあう」ことを徹底してとりくんだのである。後の山田会長，依光会長時代にもこの伝統は継承されていった。このことがまず第一に重要なのである。第二は，助言者との共同のとりくみで，高知県のそれぞれの年の現状分析を徹底し，実現可能で具体的な構想を具体化していった。その構想が，まず県青研集会を再生することであった。二年間は，ほぼ停滞状況（県青研集会未開催）がつづくが，この間実行したものは，県団役員内で「語り合い見つめあう」ことであった。これをベースにして3年目に県青研集会は60数名の参加で成功している。第三は，県青研集会を成功させるために助言者集団を形成していったことである。このためには，誰にお願いするかを慎重に吟味し，意図的なとりくみを具体化していった。第四は，県団を担えるリーダー養成の場として「龍馬塾」を発足させたことである。この龍馬塾に14名を育てるという考え方（県内7ブロックに2人ずつ）で確実に成功させてきた。参加者は，誰でもいいというのではなく，次の県団の担い手として，あるいは次の担い手としてリーダーにふさわしい人物に参加してもらうことを戦略とした。いま振り返ってみれば，この龍馬塾の助言者集団の組織化が，実は，県青研集会助言者集団を組織するとりくみにも重なっていたのであった。助言者と現役との信頼関係が深まり，助言者もその時々の県青年団運動の現状と課題を理解していく場ともなっていたのである。このように助言者とは，恒常的にその青年団運動の現状を把握していることが大切なのである。そういう助言者集団を組織できるか否かは重要なのである。

ところで，いま高知県団は第二の「高知県団再生構想」を具体化する時期にさしかかっている。80名を越える青年が参加する県青研集会，次のリーダー養成の場としての龍馬塾，ミニミニ「女子集会」をベースにした県女性の集いは既に具体化した。そのいずれもこれまで成功させることができた。これを土台にして，今度は本格的な県青年団運動の飛躍に向けて構想をつくり，これを具体化していく時期にさしかかったのである。この高知の取り組みには直接に深い関わりを持ってきた筆者として指摘しておきたいことがある。あの高知でさえできたのである。この段階の報告をすると「高知はすごい」と言って，自分のところとは別物であるかのように受け止める場合が多いのだ。高知のレポートを深く読み返してほしい。そこには，青研集会と青年団運動再生の高知型の筋道が明快である。高知の事例は，鹿児島や香川のように県青年団の体制が整っていた県団による県青研集会再生の筋道とは異なるものである。各県団の青研集会再生構想はこのように個々に創造されていかなければならないことを指摘しておこう。

青年団活動や青研集会のとりくみを通じて，いまを生きる青年が様々な場面で「語り合い，見つめあう」ことを重視していくこと，このことが今日の青年にとって格別の意味を持つことが高知県団再生のポイントになっていたことが深く印象に残る報告であった。その意味で，報告者一人ひと

りが自分自身の生きざまを介在させながらとりくみの場面々々の報告をしていたことが感動的であった。

5）宮崎，静岡，滋賀，群馬の成果に期待したい

すでに指摘したように，これらは注目される県青研集会のとりくみを展開している地域である。特に静岡と宮崎は2倍からそれ以上の参加者増を生み出している。静岡は，昨年までに村越レポートが報告され，県青年の船のとりくみと県青研集会とを結んだ成果を生んだものと思われる。今回レポートが報告されなかったのであるが，来年この成果を継承しながら静岡型の報告をぜひ期待したい。宮崎，弓削レポートは，やや消極的に報告されているが，県団としては大きな成果を生み出したのであるからこれを自信にしてぜひ来年も頑張ってほしい。弓削君は言っている。「そんな中でスゴイ仲間の発見，南郷村の紙芝居作成，小林市青年団のコーラスの取り組みなどの活動を中心に展開していきました。そして，最終的に皆の晴れやかな姿を目にしました。何か，いい知れない充実感と，今から動いていかなければという気持ちになり，涙が出てきました。そして，この青研のとりくみは，宮崎県団にとって，広げ高めていかなければならない大切な事業だと考えました」と。この実感を持てたのは，宮崎県団の青研集会へのどのようなとりくみが土台になっていたのか，そのことをもっともっと深めてほしいと思う。群馬のレポートも来年是非期待したい。また，滋賀県は県団役員体制も，地域の青年団のとりくみもかなり充実している地域である。とりくみをさらに発展させて全国が目をみはるような実践の展開と報告を期待したい。

4．青研集会づくりは現代若者の地域青年団運動をきりひらく!!

このことを何度も指摘したいとおもう。今回，特別分科会の論議が地域青年団運動をきりひらくものとしての青研集会論の論議となったことを大きな成果として確認しておきたい。但し，少し気になることがある。それは，例えば，香川や鹿児島などこれまでに成果を生んできた県団のレポートや宮崎，滋賀など注目された地域のレポートが，ここ3・4年の各県の青研集会や県青年団運動の歴史的な到達点をふまえて論じていないことである。この点は，特別分科会レポートであるので，ここ3・4年の経緯を理解している先輩役員が確認し，当該年度の特別分科会レポーターに指導・助言をするべきであろう。また，注目された静岡県，群馬県のレポートが提出されていないことである。この点は，日青協に提案しておきたい。こうした地域を落とさずに特別分科会への参加を組織していくことが必要であった。

以上，まだまだ全国的に見れば各地に問題は多いが，県段階では飛躍した成果がすでに少なからず生み出されてきている。これを励みとして，多くの道府県団が少なくとも100名を越える県青研集会づくりを目指して全国的な飛躍を生み出すべく地道な努力を継続していくことを期待して今年のまとめにしておきたい。再会を楽しみにして。

資料 2・さんしん文化と青年文化創造の参考事例

資料の説明

島仲久は，現在，竹富町青年団協議会黒島青年会の会長。「黒潮明倫塾」に合計2期，「人塾・やえやま」に1期参加し，修了生である。

平田大一は，現在，竹富町青年団協議会の事務局長を務める。「黒潮明倫塾」，「人塾ややえやま」に各1回ずつ参加し，修了生である。日出克(ひでかつ)は，『神秘なる夜明け（10曲)』のCDなどを世に出し，沖縄に限らず全国的に活躍しているプロの演奏家である。

「黒島(くろしま)♡♡(ラブラブ)」

作詞・作曲　島　仲　　久
（竹富町黒島在住）

＊1995年NHK沖縄
「みんなの唄」採用曲

（一）海鳴り　響き　寄せる波
日本の　南で，ハート島
牛が　笑顔で　今日わー
御万人(ウマンチュ)たちを　出迎える
ハートだよ　ハートだよ
ハートの情け島

（二）島の　西側　見てみれば
長く　連なる　浜美(ハマチュ)らさー(サー)
男女の　恋の　物語
愛　がめばえておめでとう
ハートだよ　ハートだよ
ハートの情け島

（三）名所　巡りは　無いけれど
自然が　自慢さ　この島は
ロマンチックな　星空と
ムーンライトが　島照らす
ハートだよ　ハートだよ
ハートの情け島

ヌキシレー

作詞　　平田　大一
（竹富町小浜島在住）

作曲・編曲　日出　　克
（竹富町竹富島出身）

上りわる太陽の光り
北極星どう抱きょる世ぬ習慣

波ぬ上渡てぃ咲かち
ぬしきてぃみりわ我ぬ魂ぬ花

蝶舞い踊りあけつ
ムリカ星どぅ読みる世ぬ習慣

魂や咲ち　魂や舞い踊る
ぬしきてぃみりば我ぬ魂ぬ花

鹿児島大学教育学部研究紀要　教育科学編　第48巻（1997）

資料 3・「鹿児島県知覧町のポスト青年団層による劇団づくり」

資料の説明

ここには，知覧町で製茶工場を営む宮原俊郎氏について紹介した同町役場観光課の朝隈克博氏による論考を紹介しておこう。原題および出典は，「人が選ばない選択肢の扉をあえて開けるからこそ，人間にも地域にも主体性が生まれる」（㈱リゾート通信社『Kagaribi』№40. 1994年4月）である。

1．仕事でも地域活動でも安穏としていたくない

薩摩の小京都と呼ばれる知覧町は，江戸時代中期の武家屋敷のたたずまいを残す旅情豊かな町である。また，第二次世界大戦末期には，本土最南端最大規模の特攻基地の置かれた町としても知られている。

基幹産業は，お茶と畜産を中心とした農業。中でもお茶は，静岡に次ぐ生産量を誇る鹿児島にあって，味，香りともにすぐれた品質で『知覧茶』のブランドを確立している。

「不本意ながら家業を継いだ」という農業経営者は多いが，ここで紹介する宮原俊郎さんも，そんな農業経営者の一人である。

「この知覧町で，代々築き上げられた製茶業を継ぐということは，ある程度の安定した生活を手に入れるということですが，それがいやだったんです」と，帰郷して家業を継ぐことになった時の心境を語ってくれた。

宮原さんは，あの“大根踊り”で有名な東京農業大学の出身で，応援団長をも務めた人物だ。応援団長の経験と知識を生かしたというわけではないだろうが，茶業農家の後継者として知覧町に帰ってからも，さまざまな地域活動のリーダーとして活躍してきた。

青年団はもちろん，農業青年クラブ（4Hクラブ）では，県の会長から九州ブロックの会長まで歴任した。不本意ながら家業を継いだという思いが宮原さんを地域活動へと駆り立てたのだという。

「仕事でも地域活動でも，安穏としていたくないんです。いくつもの選択肢の前で，行列ができているところには並びたくない。人が選ばない選択肢の扉をあえて開けていきたい。そうしなければ，人間だって，地域だって主体性は生まれないと思うんです」

宮原さんは，例えば青年団長の経験と農業青年クラブ会長の立場を生かして，両団体が一緒にイベントをつくり上げるといった，組織を超えた取り組みを成功させてきた。

そのための“接着剤”として利用したのが，演劇活動である。青年団には20数年前に「劇団いぶき」という劇団部がつくられたが，指導者もなく活動も衰退しつつあった。そこで宮原さんは演劇好きの団員を焚きつけて，県農業青年大会のアトラクションとして，青年団による演劇公演を実施して「劇団いぶき」の息を吹き返らせたのだった。

2．演劇はテレビと違って，地域限定の文化活動です

この時の作品は，県青年大会でも上演され最優秀賞を獲得。その後，県大会では3年連続の最優秀賞，全国青年大会では創作脚本賞，舞台美術最優秀賞を獲得した。

さらに鹿児島県茶業振興大会では，茶業農家の後継者問題をテーマにした演劇を上演して話題となり，いまでは県内の農業関係の振興大会から出演依頼を受けるほどになった。

「演劇はテレビと違って，地域限定の文化活動です。いっぺんに数万人の人に訴えかけることはできませんが，地域の人々の喜びや悲しみ，そして地域のあるべき未来などをメッセージとして伝えるには，最も効果的な手段だということがわかりました」

そこで今年，さらに，この活動を飛躍させる「劇団大いぶき旗揚げ」の構想を打ち出し，旗揚げ公演に向けて着々と準備を進めている。青年団の演劇部だった「劇団いぶき」を発展させて，町ぐるみの劇団を創立しようというのが宮原さんの狙いである。

「あくまでも地域の問題をテーマにしたオリジナルにこだわりながら，どこへ出しても恥ずかしくない，レベルの高い芝居をみんなでつくっていきたい」と鼻息も荒い。

かつて地方には，そういう劇団が数多くあったが，テレビの普及とともに消滅していってしまった。これは演劇に限ったことではない。宮原さんは，全国で多くの郷土芸能がどんどん消滅しつつある現状を嘆く。

「地域が，その独特の感性で文化を創造しようとする力を失った時から，過疎は始まるんだと思います。今でこそ，ようやく郷土の芸能や芸術を保存しようという動きが活発になってきましたが，守ろうとしていてはだめです。つくり出していこうとするエネルギーが文化を生み出し，芸能などを伝承させてきたということを忘れています」

そんな文化に対する宮原さんの思い入れは，町内の豊玉姫神社に伝わる“神舞”の後継者がいないことを知って，自ら踊り手を志願したり，保存会の代表も務めていることからもわかる。

「この町で何かをつくり出していこう，という人々の情熱が活力ある町をつくっていくんじゃないですかね」

ところで不本意ながら継いだという家業の方はどうか。

「静岡の人によく言うんです。静岡は，どうぞ日本一のお茶をつくり続けてください。鹿児島は，世界一のお茶をつくりますからって」

地域のクリエーター，宮原さんの挑戦は始まったばかりである。